

今から38年前の1962年、私が入所したときのアジア経済研究所のオフィスは三つのビルに分散していた。総務・管理部門と図書資料部・書庫は新大手町ビルの一角にあった。後の調査企画室に相当する調査第一部と広報部が銀座の木挽館ビル、私の配属された調査第二部（地域研究部の前身）は新橋の第三秀和ビルにあった。いずれも都心に位置し、直線距離にして相互にそれほど隔たっていないが、毎日午前と午後に「定期便」といって公用車がこの三つのビルを回り、さまざまな文書・情報や人間やときには給料袋までを運んだ。

第三秀和ビルはJR新橋駅に近い雑居ビルで、歓楽街の真ん中にあり、1階は喫茶店、地階はバー、2階には\*＊クラブというあまり性格のよく分からないクラブがあり、お世辞にも研究に適した環境とはいえなかった。ビルのエレベーターガールが、エレベーターの利用客を見てアジ研の人は他とすぐ区別がつく、と言っていた。

市ヶ谷本村町に自前のビルを建てて、3カ所に分散していた状態から1カ所にまとまったのが翌1963年の春である。研究環境はどうなったかといえば、ここでもまた大部屋で、調査研究部は一応地域ごとに間仕切りがしてあったが、音声は隣へ筒抜けだった。書棚やロッカーを境界に置いたところもあったが、境界線がどちらかに30センチ食い込んだとかどうとかで「国境紛争」や小競り合いが生じたりした。あるとき同じフロアにいる二人の部長が電話を介して大声で喧嘩をして、その声がフロア中に響き渡ったこともある。

所内ばかりでなく、外側もなかなか賑やかだった。ラテンアメリカ・グループは5階の東の窓側に位置していたため、隣の自衛隊のグラウンドがよく望めた。自衛隊の日常の訓練や機動隊員のデモ鎮圧訓練の様子がいやでも目に入った。南側の靖国通りはよく右翼の街宣車が通った。

1971年に別館が建てられ、調査研究部は別館の3階に移った。それとともに今までの大部屋から小部屋に変わったが、個室ではなく原則1部屋3人であったから本当に狭くて、机やロッカーの配置に苦慮した。別の部屋を見に行くところの二つとして同じレイアウトの部屋はなく、さすが個性豊かな人たちの集団だ、と妙なことに感心させられた。その後、1部屋2人が原則となり、調査研究部-地域研究部、総合研究部-開発研究部ではその状態が定着したが、なんといっても個室が研究者の長年の願望であった。

今度の幕張新施設への移転で研究者の原則個室が実現したことは誠にご同慶の至りである。今度は近くに自衛隊や機動隊の施設があるわけではなし、右翼の街宣車に思考を邪魔されることもない。空気はいいし、海からの風は心地よく研究環境として大変良好なように思えるが、それでもなにか違和感を覚えるのを否定しえない。それは一言でいえば<sup>ひとけ</sup>人気のなさとか人間臭さが足りない点である。周囲にいくつかオフィス・ビルがあり、もちろん人はいるのだが、人々は駅とビルとの間、ビルとビルとの間を移動しているだけで、ここに定住して地域社会を形成していない。人工的に新首都を建設した場合も初めはこんな状態なのかもしれないが。

アジ研のビルに一歩足を踏み入れても同じように人気の少なさ、人口密度の希薄さを感じてしまう。いままでアジ研といえばスペースが狭く混雑した状態で人々が仕事をしているのを見慣れてきたから、いまはそう感じるのかもしれない。しかしもともと個性豊かな、人間臭い人々が集まっているところだから、そのうちきっとこの場所、この環境に適合したアジ研らしさが生まれてくることだろう。